

平成 30 年度奈良市総合教育会議 会議録		
開催日時	平成 30 年 10 月 31 日 (水) 午後 2 時 30 分から午後 3 時 30 分まで	
開催場所	奈良市役所北棟 2 階 第 16 会議室	
協議題	一条高等学校の将来構想について	
出席者	構成員	仲川市長、中室教育長、都築教育委員、畑中教育委員、柳澤教育委員、岡本教育委員
	事務局	【総合政策部】上南総合政策課長 【教育総務部】尾崎部長、細川教育総務課長、水上教職員課長補佐 【学校教育部】北谷部長、廣岡参事、東畑学校教育課長、吉元教育支援課長 【教育委員会事務局】石原(勉)参与、石原(伸)参与、高塚参事 【教育政策課】福西課長、岡田課長補佐、堀田主任、吉原、井関 【一条高等学校】吉田校長、今中事務長
開催形態	公開(傍聴人なし)	
担当課	教育委員会事務局 教育政策課、総合政策部 総合政策課	
議 事 の 内 容		
一条高校の将来構想について		
仲川市長	<p>* 大学入試改革や、それ以上に実業界・産業界では「人材」について大きな課題としてニュースに取り上げられない日はない状況である。本市の一条高校は、これまでも市民に愛される学校として良い評価をいただいているが、このまま過去の延長線だけでいいということではない。そこで、本日は、「一条高校の将来構想」を一つテーマにして、委員のみなさまから意見をいただけたらと思っている。</p> <p>* まず、「一条高校をより魅力ある学校にするためには何が必要か」ということについて、ご意見賜りたい。事務局から説明をお願いする。</p> <p>(事務局からテーマ「一条高等学校の将来構想について」の設定の理由について説明を行う)</p>	
都築教育委員	<p>* 一条の生徒は、一般的に、勉強もできて良い子が多いという評価があるが、少し物足りなさを感じる。16 歳から 18 歳という大人と子どもの間の成長する時期に、もっと外の世界に目を向けて、自発的に探究する、挑戦する、そういう生徒が増えてもいいのではないだろうか。</p> <p>* 授業も、知識を吸収するだけの授業ではない。探究する力・挑戦する精神や、それを行動に移せること、広く好奇心をもつこと、コミュニケーション能力、多様な価値観を創造できるような力など昨今言われる「非認知的な能力」を育むような教育内容、あるいは、高校 3 年間の生活の中で一回り人間的に大きくなれるような取組、教科横断型の授業、SSS の利点を生かした授業、専門技術をもった大学や外部専門機関と連携した授業を行うこと、教員の意識、学校風土、進取の気質を取り入れた前向きな雰囲気作り、まさに一条高校のフロンティア精神に見合う視点で教育内容を見直すということがあってもよいと思う。</p>	
柳澤教育委員	<p>* 一条高校の「フロンティアスピリット」という立場でいくと、普通教育のコアは何かということ再度固めていく必要があると思った。その点で、SSS(スーパースマートスクール)の取組や Arts STEM 教育(全人教育・教養教育等さまざまな言い方が考えられるが)でオールラウンドに学び、自分の個性や伸ばしていく分野は何か</p>	

ということを先生と生徒で共有できるような新しい教育のスタイルが望ましい。

*従前の知識詰め込み型から「生徒たちはどのような力を身につけたか」ということが可視化できることが必要になる。キャリア教育の視点から「社会に出てどういう活躍をするのか」という展望を育てていくとすると、先生方の更なる研鑽が必要ではないかと思った。

岡本教育委員

*10年後20年後の社会について考えると、「グローバル」というのは避けて通れないだろうと思う。一方でグローバルが広がるということは、一方で「ローカル」、地域がもっと重要になってくる。「グローバル&ローカル」という考え方がベースにあって、いろんな取組をしていくことがいいのではないかと思う。

*おそらく10年後20年後は、いろんなことがオープンになっていくだろう。すると、一条高校の中だけで何かをやるという状態ではなくなる。農業高校や工業高校、高専、場合によっては大学、地域、企業などと連携していくような、オープン教室のような状況が必要になるのではないか。そういった仕組みを作っていくのがいいだろう。大きくは、この2つの方向でいろんな仕組み、プログラム、カリキュラム、人材育成をやっていくのがいいと思う。

*一条高校は唯一の市立の高等学校だから、一条高校の実践が奈良市の教育のシンボルになっていくという部分があるべきではないかと思う。

畑中教育委員

*一条高校がさらに魅力ある学校にということ考えた時、それは、中学で憧れて一条高校に入学した子どもたちが、将来の進路を考えたときに、持っている学力や自身の能力を一条高校で更に伸ばしていけるということや、社会が求める力というのをしっかり身に付けるということを実感しながら、納得して自身の進路を選択できることだと思う。

*藤原校長の時代に、一条高校の学びの仕組みの改革ということでSSSづくりの挑戦が始まった。私自身はこのSSSの構想を更に本格化していくことが、魅力ある学校づくりにつながっていくと思っている。ICTの環境整備が整い、教員が活用することで、今後更にWi-Fiと、スマホやタブレットなどの端末と教室のプロジェクターなどが複合的に機能していくことになるだろう。また、学校の事務がスリム化することで、教員が本来の仕事である生徒と向き合う時間を確保できることは、大きなメリットである。今後アクティブラーニングにおける積極的な端末の活用というのはメリットが大きいと思っている。

*公開研究会でも授業力の向上とICTの有効活用が主題になっているので、改革というのは現在進行中で、一条高校の独自性と発展が期待される場所だと思う。SSSの構想と併せて行われていた「よのなか科」は、創造性を発揮しながら他者と協働して知恵や技術を共有することが今後求められる力であり、授業の中で養っていくことができると感じた。社会と学校を結び付けるという点では、「よのなか科」のような取組も必要ではないかと思う。「よのなか科」の要素を一条高校の中で残して、生徒自身の、考えて意見を言う力を更に伸ばしていく視点は大事だと思う。

中室教育長

*今年の6月に経済産業省から出された「未来の教室とEdTech研究会」や、文部科学省から出された「『society5.0』に向けた人材育成」で、第4次産業革命以降に求められる人材の姿というのはいづいぶん提言されてきている。そこに結び付いていく

学びについて考えたとき、「一条高校が今いい学校だからと立ち止まっていいのか」と思う。「じっと立ち止まっていたら、世の中のスピードが速いから下りのエスカレーターに乗っているのと一緒にだということ意識して欲しい」といつも言っている。吉田校長も着任され、新しい方向性に沿ってしっかりと取組を進めたい。一番の課題は、学校の教員がそこをどう意識するかというところが大きく、キーを握っていると思う。

仲川市長 *吉田校長から、今の取組や校長ご自身のお考えなど少し述べていただきたい。
(吉田校長から一条高等学校の教育構想について説明を行う。*別紙「奈良市総合教育会議資料」6～7ページ参照)

仲川市長 *市民の方から「一条高校を奈良市の学校として運営する必要性があるかということについて議論しているか」というご意見をいただいたことがあった。奈良市の税を投入した「奈良市立」ということが大前提であれば、「なぜ市立高校が存在し続ける必要があるのか」「どういう学校を目指すのか」、単に属している生徒がよくなるということのみならず、奈良や世界にとってこの学校の存在が有意であるということが一つ大事であると思う。

*カリキュラムの中身論と枠組み論、大きく二つがこれから詰めていくべき論点である。例えば、通学区域の設定や、今の9クラスがいいのかなどの枠組み論。今の普通科、外国語科、人文、数理という4コース編成のままでいくのか、クラス数をどう調整していくべきかという議論等々。

都築教育委員 *学科のことでは、外国語科はやはり、一条高校のシンボリックな存在であった。自分が中学生のとき、女子は一条高校の外国語科に行って通訳やキャビンアテンダントになるという憧れの存在であった。40年少し前は、英語を学んで世界に飛び出す、外の世界とつながるといった選択肢は、女の子にとってはそれくらいしかなかった。でも今は英語を学んで、その先に何があるかという選択肢が多様だ。外国語科で学ぶ先に何があるかというものが、中学生にとってもう少し見えやすい学びであるといいと思う。

*他者に対する理解や尊厳をもって、よりよい世界を築くために貢献できる、国際人を育てる等、どういう人を育成していくか、そのために今に合った外国語を学ぶというカリキュラム内容やそれが存在する意義の見直しが必要であると思う。一条高校の外国語科が今までのようなシンボリックな存在という見方をしている方は多いだろう。

柳澤教育委員 *文理融合型というのは大学レベルという印象があるが、高校でそれができれば問題はない。英語教育は、フロンティアスピリットという視点で、戦後、先進的な取組の一つとして、英語を入れるべきだという考えがあったのではないかと思う。そうすると、普通科をベースに複数のコースがあり、入学してから決めるというような柔軟なものに変えた方が良いのではという印象だ。

*学校規模で言うと360人で9クラス編成は、大規模校だ。奈良市をマーケットにして、9クラス編成を維持できるかという、難しい時期が来るだろう。しかし、私の経験から言うと、難しくなった段階で変えようとしても手遅れとなるので、余力のある今のうちに、つくりあげていくことが必要だ。

岡本教育委員	<p>* 高校 3 年間、コースを最初に決めると良いのだろうが、実際高校 1 年生の段階で、「自分がこのコースが向いている」と判断するのは難しいのではないかと感じる。高校 1 年生のときの授業ではいくつかのコースが複線的にある、というのであれば理解ができる。一方で、シンボリックな教育のモデルをつくっていくとなると、それが 3 年間でできるのかということを感じる。そうすれば、中高一貫の中学校から 6 年間という中で、高校 1 年生のときに文理のコースに分かれるというように、中期的な長さの中で教育をしっかりとしていけば、本当に良い教育が実現できるのではないかと感じる。国際バカロレアをするにしても、高校 2 年次、3 年次に分ける。中学 3 年間と高 1、高 2 でしっかりと固めて、高校 2 年・3 年でどこを受けるのかということができるのではないかと感じる。</p>
吉田校長	<p>* 人気の学科があるのは良いと思う。今の一条は、その学科で何を学べて、将来どういう方向に行けるのかということを示してない課題はある。特に普通科は、学科としての特色を出せていないので、「ArtsSTEM」など中身の看板を掲げていきたいと思っている。</p> <p>* 学科再編は、生徒減少を考えると、避けられないものだ。教育内容をより具体的に議論していく中で、一番良い形を一緒に考えていかなければならないと思っている。</p>
仲川市長	<p>* 3 年間だけで学びきれるか、もしくは入学してからコースを選んでも 3 年間は短いのではないかと議論について、もう少し、中学も含めた長い教育課程の中で、一つの成果を求めていく。この意見についてはどう思われるのか。</p>
吉田校長	<p>* 今の一条の生徒は本当に素直で良い子たちだが、もっと尖った子どもを育成しないとダメだし、鍛えればもっともっと伸びる子もいる。</p> <p>* 中高一貫で 6 年間というのは特色のある、尖った子どもを育むということでは面白い試みであると思う。そのために、一条としての研究や研修を続けていこうと思っている。</p>
畑中教育委員	<p>* 大学入試改革が変わり、「高大接続」と言われた。高校の学びが変わって、さらに義務教育での学びも当然変わってくると思う。中学校での授業スタイルや教育内容も当然変わってくる。それに先駆けて、一条高校が中学校の段階から中高 6 年間一貫して、社会と教室をつなぐ学びを実践していくというモデル校になっていくという意味では、中高一貫というのも一つのスクールアイデンティティだと思う。</p>
中室教育長	<p>* 今、一条高校が国に申請しようとしている SSH も、一条高校が取り組むだけの申請ではなく、市教委が国への申請を挙げていく。学校と協働して、幼稚園から高等学校までを持つ自治体なので、高等学校だけを変えるのではなく、あるいは、高等学校の出口を見せるだけではなく、それに続いてくる幼小中がどうあるべきかという一体の図を示したいと思う。一条高校がその最後のフラッグシップとなるように市民には見せていく。2030 年には、「県立高校とは違う」というような示し方ができればいいし、その議論がしたい。</p>
仲川市長	<p>* 決めるにはこれからかなり議論が必要で、色々な可能性を詳細に検討していく必要があると思う。例えば、カリキュラムの見直しという延長線で、中等部という議論を検討してみたらどうだろうか、というような話が今出ている。検討していくことでよろしいか。</p>

- 柳澤教育委員 *中高一貫は、私学関係者から見ると、受験対応型になる。だから、一条で新しいタイプ、つまり普通教育の部分にSSHを乗せるという新しい形が描けたら、受験一辺倒ではない一条の良さというものが光るという理解をする。したがって、中高一貫というのは十分ありえる話だと思う。
- 仲川市長 *今人気があるからこのままでいいということではなく、また、子どもの数が減ってしまってから大慌てでやっても間に合わないであろう。一条改革はまさに今こそ、しっかりとした将来を見通した議論をしなければならないという共通認識は、みなさん一致していた。
- *カリキュラム編成については、しっかりと戦略的に考えるべきだということで、中学との接続というところも含めて議論すべきではないかという点については、概ね皆さんの共通認識であったかと思う。具体的な方法論、それからどういうところにメリハリを設けるか等については、吉田校長を中心に更に深めた構想案を随時お示しいただければよいかと思う。
- 中室教育長 *一条高校の評価は、現場の校長、保護者、あるいは卒業生に聞いても「いい学校だ」という声しか今は出てこない。もちろん、いいところはあると思う。だから、全部変えるのではなく、いいところをしっかりと残して、課題になっているところを全部変えるというような意気込みが必要だと思う。そのメリハリを持っていきたい。
- *学科の再編も、外国語科の話が出たように、やはりいいところを残していくのか、そこは時代の要請に合わせていくのか、というところをしっかりと考えていきたい。市長が冒頭に言われた、産業界で求められる人材養成、これをしっかりと見据えていかないと、2030年になったときに一条から輩出している子どもが社会を変え、生き方を変えていく子に育っていかないだろう。「尖った子」という表現があったが、社会を新たに創っていける子を育てたい。
- 仲川市長 *この件は非常に大きく、重要な議論だと思うので、是非、事務局の方でも継続的に調査を進めていただきたい。また随時教育委員の皆さんとも市長部局ともコミュニケーションをとって、よりよい一条丸の第2ステージを考えていきたいと思っているので、今後ともご協力のほどよろしくお願ひしたい。